新入園兒を迎へる

入園兒童に就て

仙臺　青葉女學院　ベルニス・ジヤンセン

幼稚園に入つて來る子供――年齡は僅か四歲、五歲ではあるが、考へ見るゞ私共の一生のゞの時期よりも素晴らしい發達をその數年間に完成して來た子供なのである。まるで小猫の樣に賴り無かつた生命が、今は自分の身體が支配出來る樣になつてゐる。學校も敎師も無しに言葉を覺え、私共の住む大きな世界ゞ大分交涉を持つて來てゐる者ゞなつてゐる。このわづかな數年間に子供が如何なる完成、いかなる能力を獲得して來たかを先づ見てみやう。

子供は何ら科學の法則を知らなくゞも、物體の固さ、軟かさ、熱さ、冷たさ、物の大小晝夜の別ゞ云つたものを經驗によつて知つてゐる。何か卓子の上にある重い物を引張れば大きな音をたてゝ落下する事を知つてゐる。それで落ちない先きに目をつぶつて仕舞ふ。自分に使用出來る物ゞ出來ない物のある事を知つてゐる。赤い物は容易に見分けがつき、又色によつて物の區別も出來る。

この年齡になるゞ面白い簡單なお話なら聞いてよくわかる。話を聞いたり、會話をしたりする集中力の限度は始め五分から、徐々に二十分位迄に延長する。子供等は無限の好奇心を持つ――その興味は積木の汽車から複雜な飛行機、動物の鳴聲、飯事、ピヤノや時計の內部に迄及ぶ。

特に環境に對する銳敏な感受性には實に驚異すべきものがある。人の神經質な樣子に素早く氣付き、幼稚園で如何

な訓練が行はれてゐるか敏感にみさつて仕舞ふ、愛さ暖い理解には如何に敏感である事であらう。そして自分のへた經驗から割出して新しい經驗を測り幼稚園が好きださか嫌ひださか、それで決めて仕舞ふ事になる。

如何してこんなに短い間に色々覺えるに至つたかさ云ふに、それは感覺に導かれて、知らず知らず見、聞き、嗅ぎ、ふれて感じる事から始まる。そして更に兩親や兄弟達のする事を眞似て目や耳、手足を使ふうちにいつか自分自身の經驗の世界が出來て來るのである。

そしてこの四五年子供は自分の世界に住んでゐるが、やがて父母が幼稚園に通はせる事にきめる。それで先づ我々教師の考へる事は、いかにこの樣に育つて來た子供達を幼稚園生活に順應せしめたらよいかさ云ふ事である。先づ其一つは習慣の形成からはじめられる。

良い習慣をもつて幼稚園に來る子供達にはそれを基礎にして團體的な生活の習慣をつける事は非常に容易である。惡習慣を持つて來た子供はそれを矯正してその上によき習慣を養はねばならぬ。しかし皆一緒になるのであるから、一樣に團體的な訓練から始めるべきである。それは皆一樣にはじめるので何らわけへだての感が無く最良の方策である。

先づ第一に獨立する氣持を養はなければならない。お母樣や女中の附添ひは初めの週だけは許すが、次の週からはもう玄關迄で、あさはすつかり先生のお世話に委ねなければならない。泣いたり叫んだりしても子供には別に害にならない。はじめからかうして教師さ家庭さ協力出來れば先づ第一の難關が越せるわけである。一週間ばかり毎朝泣いて困る小さい兄弟の子供達があつたが、次の週からは外の子供さ變りなく皆の中に入つて遊べるやうになつてゐた。

次には帽子や上套や辨當袋などをきちんさかける習慣をつける事である。これにはよく面倒を見て監督しなくてはならない。子供が自分で外套をぬぎ自分の外套かけにきちんさ落ちないやうに掛けるやう先生はよく見屆けねばならない。こんな事をした事の無い子供が澤山ゐるので、この習慣をつける爲には幾週もかゝりなか〳〵忍耐のいる仕事である。よく注意してなか〳〵外れないボタンや堅い新し

い靴なぎの場合は直ぐに手を借してやらねばならない。入園當初からかゝるしつけは見逃してはならないので、さうすれば非常に一切は容易になる。

次にはお便所の習慣である。はじめの一ヶ月位は三十分置き位に御不淨通ひをしなくてはならない子供があるが、やがて午前中三回行けば大丈夫になる。子供のパンツやブルーマは樂に子供が獨りで下し、きちんと上げられるやうに作つてあつて欲しい。又手を洗ひ自分のタォルできちんと手をふく事を教へなくてはならない。手洗流しや手ぬぐひ掛けゝ高さが子供の背に丁度よいならば水が床にこぼれる樣な事もない。又お水を飲む時にも子供がちやんと自分自身のコップを用ひる樣に注意しなければならない。

お辨當の時間は子供達の爲にたのしい時間である。そして、それをお食事のお行儀を教へると共に、健康に役に立つ習慣を學ばせる時とするとよい。卓子にお行儀よく向ひ、ゆつくりと口にいつぱい入れずに小口に食し、お辨當を殘したりものをこぼしたり、しないやうに注意せねばならぬ。

このやうな事は教師がいつも心掛けてゐなければならない事である。このやうな習慣についてはしば〳〵子供達とも語り合ひ、又何故かう云ふ習慣が幼稚園で必要か說明しなくてはならない。然し又同時に幼稚園では毎日新しい事に子供達が直面して來るのであるから、單に急がず焦らず各個人の個々の習慣や必要を充分に理解して着々と習慣づけなくてはならないのである。

入園當初は、子供達に色々無理にならないやうに、年長の子供達と一緒にする前、三日位先きにはじめるとよい。子供達はゆつくりと幼稚園を眺め、玩具であそび、先生と親しみ、又先生も新しい子供達と親しむ事が出來る。最初の日は一時間を越えないやう、二日目、三日目は一時間半位、そして三日目からお辨當を持つて三時間來るやうにするとよいと思ふ。

徐々に子供は團體の一員になつて行く。自分の個性を充分に發揮しつゝしかもそれで團體の協力精神をさまたげてはならない。自分も外の子供も同時にほしいもの、したい事があるのを知り、代る〴〵ものをする事を覺えて來る。かくしてその經驗はひろまり、個性もはつきりと浮び出て

やがて私共が人格と稱するものに子供自身成長して來るのである。

小さい子供にとつて、遊戯は一つの言語である。話しの出來ないうちから、あそびで表現して來たのである。それは表現の一つであつて、五歳位迄は大方自然的な遊びの方がお話や歌よりも先きに來てゐる。それ故新入園兒がはじめ幼稚園の行事に大した興味を起さなくとも落膽する必要はないのである。——そんな子供は自分だけでわかる方法で自然に自分を表現してゐるのであるから。——自由な遊戯でそれはなされてゐるのである。はじめの幾月かは子供各自に肉體的にも情緒にも智的にも、また精神的にものびる事の出來る機會を與へられるやうな簡單にしてしかも伸縮性のあるプログラムを作つて、良習慣の形成につとめなければならないと思ふ。實に教師にとつても教師自らの實力をためす時で、自分が子供達にかゝる發展をさせんとしてゐるや否や自ら省る時であると思ふ。

新入園兒を迎へる心組

大阪市立久寶幼稚園　藤本ツギ

春だ、而も非常時の春だ、樂園の裡にも春が來たのだ。木々の芽は夫々の持ち前に於て勢よくふいて居る。暖い風が芽を出させ、春の雨が蕾を脹らませる、然し其の春風と慈雨よりも根本的なものは落葉の一葉に秋の寂寥を感ぜしめられた其の時から、今日の準備が行はれて居ることである。私共の新入兒を迎へる心構へも一日々々の經驗から來るべき年をあゝもかうもと構へられつゝ今日を迎へるに至つたのだ。

新らしい子等は迎へられた。輕やかな足ごりで園のお仲間に加つた。此の子の父も母も乃至は祖父母もいたいけな